

## ドイツにおける「書簡文化」 (Briefkultur)と女性の書簡

渡 邊 洋 子

私は Bettina von Arnim という人を研究しておりまして、もともと彼女の作品が書簡の歴史のなかでどういうふうに位置付けられるのか、ということで書簡に関わるようになりました。今回のお話は、一応このような（配布資料、後掲）AとBというコースを設けてみまして、二つの方向から書簡文化と女性の書簡というものを考えてみようと思います。

Aの方は〈自己表現の発展としての書簡〉と、ポジティブに女性の書簡を捉える方向です。私の今までの論文は、こういう方向でやっておりました。それでもやっているうちに、まてよ、という感じになりまして、これがBの方で〈自己を閉じこめるものとしての書簡〉と、マイナス面のコースをも考えております。そして、あとで皆さまのお話を聞きながら、私自身の思っている問題点などについて、色々示唆が頂けたらと思っています。

それではAの方からお話させて頂きます。資料には文学史の項目が並んでいますが、ここではドイツの書簡文化というものを、18世紀末から19世紀半ば、約百年のスパンで見えております。イギリスやフランスでは17世紀が書簡文化の時代と言われていますが、ドイツではちょっと遅れます。これをもう少しわかりやすく説明しますと、Sophie von La Roche という人がいるんですけども、この人が二十歳ぐらいの時が18世紀半ばなんです。その娘の Maxe、それから先程申しました Bettina、これは Maxe の娘でして、Sophie の孫にあたるわけです。この Bettina が死んだのが1859年なので、だいたいこの三代がドイツにおける書簡文化の百年のスパンにあたるのではないかと思います。で、書簡文化を説明させて頂くのに1から5まで、文学史の項目を挙げておりますが、文学史の項目というのは、女性の文学活動を考える際には、あまり目安になりません。このことを最初にお断わりしておきます。

この書簡文化のなかで最初に啓蒙主義が出てきます。ここでは、個の解放がキーワードになるのではないかと思います。ですからこの傾向は当然教育の普及とか、女性の教育というようなことにも及んでいきます。そして同時に起こるのが「感傷主義」。これは理性重視に対して感情を重視する。ですから女性的なものの評価に繋がってきます。社会全体の流れから見ますと、ドイツではこの時代に、教養市民階級というものが起こってきます。そして「公共性の構造転換」というのがありまして、市民たちが力を持ち、お互い同士、私的な場で討論を闘わせるようになって、逆にこのなかから公論・世論が起こって、こっちが公になる。ドイツの書簡文化といわれているのは、ちょうどこの時代です。そしてここで新しい価値観を打ちたててきたのが教養市民階級なんですね。教養市民階級の精神的土台、これは家庭ですから、それを支えるのは女性なので、女性の教育が奨励されます。教養ある家庭を作りたいというのが市民社会の要求になってきます。そうすると、文字を覚えたり手紙を書いたりすることを始めた女性たちは、一気にそれに夢中になってしまう。それで読書熱とか、書簡熱とか、まるで熱病のような流行が起こります。そして先程言いましたように、私的だということに価値が、いわゆる公的な価値が出てきます。当時の言葉で、“よい手紙”を形容する言葉なのですが、「印刷出来るほど」「よい手紙」というドイツ語の言い回しがあります。つまり個人的な手紙ですから、本来公的なものではないはずなんですけれども。そういう言い回しがあるほどに、私的なものが公的な価値を持つてくるというわけです。

別の面からみますと、今まで教育がなかった女性たちが文字を覚え、手紙を書いたりするようになるわけです。それがとても自然であっていきいきしている。つまり、女性には今まで色々な教養、ラテン語とか、レトリックの難しい知識はありませんので、ドイツ語で手紙を書く。すると、ドイツ語・ドイツ文学を純粋化して改良しようという運動が17世紀ぐらいからあったのですが、その中から女の手紙を褒める人たちがたくさん出てきます。

Gellert という人は、女性の手紙はすばらしいと非常に称賛しまして、女性はますます一生懸命に手紙を書くようになります。次に道徳週刊誌と資料に載せておりますが、これが女性を読者層にして非常に売れるわけですね。この編者はだいたい男の人なんですけど、女性名を使って女のふりをしています。そして手紙のかたちを多用します。読者からの手紙も大歓迎で、読者と手紙のかたち

でいろんなやりとりをして、ますます売れる。そういうブームがあります。その影響も当然受けて、イギリスやフランスからの書簡体小説がたくさん入ってきます。1740年に Richardson の『Pamela』が出来て、43年にはドイツ語に翻訳されて、売れに売れたわけですね。同時に、女性心理なんかを扱ったいろんな小説や戯曲が出てきて、これもブームになります。やはり感傷主義との関係で、女性が文化の中心に出てきたという時代です。それとともに、皆が書きはじめた書簡、そしてその書簡を使った小説ということで、熱狂的に読者がのめりこむという文化が、ドイツでは起こってくるわけです。

そのうちに、実際に女性の手紙を使った小説が大ヒットします。それが Sophie von La Roche の書簡体小説『シュテルンハイム嬢物語』です。これは1771年に出版されますが、「女友達の手によってオリジナルの手紙や信頼のおける文書から採録された」という副題がついております。これは数人の手紙で構成された小説です。これが出たとき、Wieland という当時の人気作家が編者として前書をつけました。このときには Sophie von La Roche という著者の名前はありません。これは当時のはやりなんです。つまり私の友達がこれを作ったんだけど、決して文学作品・芸術を創るなんていう野心はなくて、ただ心のままに書いた。そして出版したくないと言ったのに私が集めて無理に出版したという前書をつけています。これは女性らしさというものを強調しないと作品が出せないという、代表的な例なのです。それと、自分の名前を著者として出さないのも一種の流行です。ベストセラーになりまして、72年に Goethe が書評してるのですが、「今皆さんが批評しているのは本だと思ったら間違いです。これは魂なのです」という言い方をして誉めている。これは女性が書いた最初の小説というふうに受け取られました。そして、その次に資料には Kunst/Natur の下に線を引いてありますが、当時、Kunst (芸術)・Natur (自然) という対立概念があって、これがここでは非常に複雑に絡み合っています。Sophie という人は、この後小説をいっぱい書きますが、この『シュテルンハイム嬢』の主人公もゾフィーという名であるためか、この道徳的な、女らしい主人公とどうしても同一視されてしまう。それでこれから抜けられなくて、それ以後の作品はあまり評価されません。ですので、La Roche はどうも後の発展がないというふうに言われています。書簡体小説というのは、実際の手紙で組み立てるといふ体裁をとりますので、書簡体小説の著者と主人公との距離がなくなっ

てしまう。その上、それを読む読者との距離もどうもきちんと取れないという現象が生じやすいようです。

次に Goethe の書簡体小説『若きヴェルターの悩み』。これが1774年に出ると、読者が主人公のヴェルターに夢中になって、ヴェルターを真似た自殺などが起こるぐらい熱狂的なファンが出てきます。これも書簡体小説特有の現象だろうと思います。この小説は彼自身の体験にもとづくものなのですが、Goethe という人はこれを書いたことによって自分の体験を克服します。つまり、作品化することによって主観的なものを克服して、次の段階へ進んだ。ですから、Goethe は後になってからは、あの時代はもう過ぎ去ったものだというふうに言っております。Goethe も若い頃には感傷主義的な時代の影響を受けて、いろんな人と文通しています。ただ、作家として成長するにしたがって、手紙が多くの人から来て、その返事を出すのはものすごく時間がかかる。ですから、自分は大切な友人に手紙を書く代わりに小説を書く、だから遠くにいる私の友人は私の小説を手紙だと思って読んでくださいと言い出します。彼はその後さまざまな作品を書いていくわけですが、1821年ぐらいに『マイスターの遍歴時代』という小説を書いています。そのなかで手紙を小説の中に取り入れているところがあります。たとえばマイスターの滞在している家が教養市民階級の家なんですけれど、その家のおばさんとか姪たちがしょっちゅう手紙を書いている。それを風刺しています。ここでも書くということ (Kunst) と生活すること (Leben)、この関わりが問題になっています。手紙を書くということは本来、自分がこうしたあした、ということを書くわけですが、その関係が逆転するようなのです。もっと時代が下ると、書簡とそれを書く人に対する風刺が非常に酷いものになってきます。「今時の女どもときたら恋をするのにも、手紙にそれを書こうと思って、手紙の材料のために恋をする」というような風刺がされるようになってくるんですね。Goethe 自身はこうして、手紙・書簡小説から脱皮して、古典主義を作っていくわけです。

このあたりに重要なこととしてはフランス革命がありまして、18世紀末から19世紀にかけてガラッと社会の体制も変わってくるし、人々の意識も大きく変わっていきます。そして、フランス革命以後、というかフランス革命とともに、古典主義とほぼ同時期にロマン派というのが出てきます。ここでは Kunst と Leben、つまり芸術と生活を一致させなければならない、という考えが核になり

ます。芸術というものが生活に対してオープンになっていくという傾向。言い換えると、固定したジャンルをこえてさまざまなものを混合させる、そして、生活に向けて開いていくという文芸思潮なんです。そこで手紙がまた文学的な価値を持ってきます。例えば F・Schlegel というロマン派の理論家は「手紙というのは、もっともロマン的なものである、いや小説そのものが一種の手紙なのだ」と言っています。そして実際にロマン派でも手紙はいろいろ使われるようになりました。

その次に、資料にはサロンのことを載せているんですけど、ドイツでは18世紀に、サロンというのが非常にさかんになります。そしてロマン派においても、文学サロンが出来ますが、そこでもやはり手紙というのがもてはやされます。“よい手紙”を書くと、サロンで一種の名声を得ることが出来る。もともとは私的な手紙なんです、ある種の文学的名声を得ることが出来るのです。ですから親密、つまりプライベートなのに、実はどこかで公開されるだろうと思いつつながら書いているという絡み合いがここにも見られます。そしてここでは女の人がたくさん出てきて、面白い手紙を書きます。彼女たちの手紙というのは感傷主義の頃にもはやされた手紙とは違って、女のたしなみや当時のモラルに反するようなことをたくさんしながらそれを書いたりしていますし、非常に個性的な面白い手紙を書くようになります。特に Rahel という人などは、「私が書けるものは手紙だけなのだ」というふうに言っています。彼女の手紙は、瞬間性・断片性を大切にした非常にモダンな、意識的なものです。当然、彼女は皆が自分の手紙をいろんなサロンに持ち歩き、皆で読んでくれるというのを意識して、そういうふうな手紙を書くようになっています。ですから、ロマン派の時代というのは女性の面白い手紙がたくさん出た時代でもあります。ここで再びまた世間が女性の手紙を称賛するという動きが出てくるのです。例えば Grimm なんかは誉めているつもりで、手紙というのは非常に微妙なものだから、女の人の書くものはすべて手紙とみなすのが一番いいのだという言い方をしています。つまり文学という確立された領域からちょっとはずれたところに女性の文学活動を位置付けようとする傾向が、書簡文化の最後の段階ではみえてくると言えると思います。

時代は移りまして、芸術の時代から政治・リアリズムの時代へと移っていきます。この時代にはプライベートな書簡の出版が非常にさかんになります。リ

アリズムの時代ということと関連して、手紙は人々の生きた証、ドキュメントとして読まれるんですね。だから〔親密・公開〕あるいは〔親密・暴露〕という対立概念がここにあてはめられるのではないかと思います。つまり皆が他人の内面、生の証を見たがるという時代になってきたのです。もうひとつは政治の時代ということもあって、公開書簡みたいな、目的性を持った政治的パンフレットとしての書簡がたくさん出てきて、これは19世紀へまた私たちの時代へと繋がっていくわけです。このあたりで百年にわたる書簡文化の時代というのは終わるのであろうと思います。そして最後に、G・Kellerの『悪用された恋文』(1855)。これは短篇小説なんですけれど、芸術と生活の絡み合いの嫌な面を風刺した作品なんです。この作品のなかでは、感傷的な手紙を書く女が非常に辛辣に風刺されています。百年間にわたる書簡文化の最後に、こういうものが出てきたというのは、現代に続く問題がここにあるのかなという気がしていますけれど。ともかくこのあたりでドイツにおける書簡文化についての話は終わります。

最後に Bettina ですが、『ゲーテとある子供の往復書簡』という作品を50歳ぐらいで出しています。これは1803年頃にゲーテと交わした実際のオリジナル書簡を、30年後に手を入れまして、書簡集として出したものです。筋といえるようなものはありません。これも純粹にはオリジナルではないのにオリジナルという体裁で出しております。次の『ギュンデローデ』もそうです。『ブレンターノの春の花冠』、これも兄と交わした書簡を編纂して出しています。こういうやり方は特にゲーテ研究者なんかからは総攻撃を受けまして、フィクションなのか、ドキュメントなのかという論議を巻きおこしました。ここでは〔フィクション・ドキュメント〕という対立概念のペアですね。言い換えると〔本当・嘘〕というペア。先程から〔公・私〕とか、〔Kunst・Natur〕、〔親密・公開〕とか言っていますけれども、ここでまた新しいペアが出てきます。それで私としては、Bettinaの書簡体作品というものが、本当に今までの百年の歴史を受けて新しいジャンルを完成し、現代へと繋がってくるものなのか、それとも書簡体というものの限界なのかと考えます。女の手紙というのは非常に誉められて、女にふさわしいジャンルと言われているんですけど、果たしてそうかなと思っています。

では資料のBへ移らせて頂きます。これは書簡文範の話なんです。ドイツの

書簡文化は、「感傷主義」の時代とほぼ重なっています。感傷主義は、文学史では18世紀末で終わったと言われますが、実はずっと後をひいていると私は思っています。そしてこの時代にはたくさんの書簡文範が出ていますので、この関係から書簡をめぐる論議をみていきたいと思います。書簡文範を、ドイツ語では Briefsteller と言います。これには当然、ギリシア・ローマの頃からの伝統があります。17世紀ぐらいですと、文範の一方の傾向は、Kanzleistol(官房書簡文範)と言いますが、お役所の難しい文章を作る時に使われたもので、堅苦しい文体のお手本です。もう一方には Galante Briefe があります。つまり宮廷風・貴族風で、男女の書簡なんかもそれで書いていますけれど、そういう社交的な、ある意味では薄っぺらで嘘ばかりというようなもの。17世紀にはこの二種類がだいたい書簡文範として出されています。18世紀に入りますと、ドイツでは書簡の時代、ただしプライベートな書簡の時代なんですね。つまり市民が個人として手紙を書く時代なのです。1709年に Neukirch という人が書簡文範を出してまして、ここでは自然に理性的に、話すように書けと言っています。この後、書簡文範はたくさん出版されます。ドイツ語の改革ということとも絡んで、もっとよいドイツ語の書簡が出るようにという改革も進んできます。そしてドイツでは、書簡というものはどうあるべきかという指導要綱みたいなものの伝統があるんですが、だんだん理論よりもむしろ文例を載せるような方向で動いてきます。

そしてちょうど書簡文化の始まり、1751年に、Gellert という人の『書簡』という本が出ます。副題が「書簡における良き趣味についての実践論考をそえて」です。ほぼ半分以上モデルの書簡が並んでまして、前半の部分が実践論考。もちろん理論の部分もあるんですけど、実際の文章を例としてあれこれ批判する実践論考です。これは非常に売れたものなんです。Gellert という人は、人気のある作家でして、詩や寓話、いろんなものを書いています。有名なのは感傷主義小説の『スエーデンのG伯爵夫人の生涯』、これは当時たくさん出てきた、女の人を主人公とした小説・戯曲のごく最初のものです。Gellert も書簡文範として挙げた手紙を自分は編纂しただけだと言ってるのですが、大部分の手紙が自作のようです。人気作家が編集した書簡であることと、書簡そのものが非常に面白くてフィクションのような感じがするために、この本は大人気になります。そして有名な Gellert の言葉、前書のところで「手紙はよき会話の自由な

模倣であれ」というようなことを言ってますが、これが書簡文化のキーワードになって、ずっと受け継がれます。つまり規則通りに書くのではなくて、自然に書けということです。ここでも [Kunst・Natur] が問題になりますが、この場合の Natur とは、要するに市民的美徳という意味なんだろうと思います。それを Gellert は「自然」と言ってるんですね。だから決して野育ちの娘たちが書いた文章、これをよろしいとは言わない。Gellert にとっては Natur (自然) の反対はどれも Unnatur (不自然) という概念なのだという感じがします。要するに「自然」とは自分が好む市民的美徳だと思っているらしいのです。ですから Gellert 自身の言葉にも矛盾が出てきて、女性は自然な手紙を書くものだ、だから女性により手紙が書けるような教育をしなければいけないと、「自然への教育」というような、矛盾したことを言っています。この対立概念が非常にややこしいのですが、手紙に関しては最後までこの問題がかかわってきます。

そして「自然」というものの次に、「本当のことを書け」というキーワードがあります。Jacobi という人が、『Iris』という女性向けの雑誌を出していたんですが、このなかで「手紙について」という論文みたいな記事を書いています。Jacobi は感傷主義の作家、理論家でもあります。彼も手紙は自然に書くのがいいと言うんですけど、それはいきいきとした書き方とか表現の問題ではなくて、むしろ本当の純粋な感情を表現せよということをやっているのです。ここで重心が移ってきます。ですから例えば、「もっともよい手紙というのは、もっとも美しい魂によって書かれるのだ」というようなことを言うんですね。気取ったみせかけはいけない、いくら上手に書いてもそれが嘘ではいけないのだという。だから手紙によって「真の自己」、本当の自分を表現せよと言います。ここでもやはり [真・偽] という対立概念へと引き込まれていく感じなんです。で、その次の Moritz、この人は深層心理学などをとりあげた最初の作家だと言われており、自分自身の深層心理を扱った自伝小説『アントン・ライザー』を書いています。この人は Jacobi よりもっと進んで、書簡文範を全否定しています。つまりモデルに従って書くなんていうのはだめなのだと言っています。手紙では individuell な、もっとも独自の考えを表現するべきである、と言うんですね。オリジナリティが大事だと。だからといって、奇をてらうような表現ではなく、本当に自分のオリジナリティを上手に文章化するのが大事だということをやっております。やはり [真・偽] ということなんです。ただ書簡文範



をずっとみてくると、Moritz の段階では、論ずる対象を手紙に限らず、文章論みたいになってきますので、しかも、モデルに従って書くのはいけないというようなことを言いますから、だいたいここで書簡文範というものは出尽くしたという感じになってしまいます。19世紀もすすみますと、書簡文範は確かにたくさん出るのですが、もうすっかり通俗化・大衆化して、家庭に一冊というような日用品になってしまいます。そのうえ書簡文化の時代が終わって以後は、手紙＝センチメンタルという結びつきが自明のことになってくるようです。

うまくAとBが結論としてまとまらないのですが、今私が考えていることをもう一度述べてみます。ドイツの書簡文化は「感傷主義」という土台に出来ていると思うのですが、それが英仏よりほぼ百年遅れてしまった。つまり近代の市民社会が確立し、しかも資本主義がどんどん力をつけていく時代にあたってしまって、感傷主義がゆっくり時間をかけて育つ時間がなかった。どうも始まると同時に社会の実際の進路とそぐわないものになってしまったのが、ドイツにおける感傷主義の特徴ではないかと思います。感傷的なことを言っていたんでは資本主義社会を生き抜けないというのは一目瞭然なので、若い人たちがそれに染まることを、皆が警戒するという現象が起こります。で、Campe という教育学者は、感傷主義が出てきてすぐに「真の感傷主義と悪しき感傷主義」という区別をしています。こういうことが最初から付随していて、これがドイツでは特に大きな問題だと思います。女性に関していうと、暖かい心とか友情とかいう〈真の感傷主義〉というのは、家庭のなかで育むべきもの、つまり女性の持ち場にされるというふうになってきます。近代の所産として出てきたいろんな対立概念、これには常に「男・女」という対立概念が絡まって問題を複雑にしているようです。1834年の *Damen Conversations Lexikon* をちょっと引いてみます。この時代、文学史における感傷主義はとくに終わっているんですけど、ここにどう書いてあるかという、感傷主義は「女心にもっともふさわしい、気高い特質だ」と書いてあり、書簡は「女にふさわしい分野」というふうに書いてあります。これをAとBを結ぶ手がかりとして、後で色々みなさまにお話を伺えればよいと思います。どうもご清聴ありがとうございます。

以上は、平成8年12月13日に行なった研究会の報告である。参加者は、友田孝興、並木治、村瀬順子、村井英雄、竹村はるみ、名倉弓子、宗晴美、北城伸子、荒井とみよの9名。

議論になった問題点は次のとおりである。

- ・英、仏は書簡体から近代小説の時代へと向かうが、独では別経路で小説へ→精神性の違い、時代のずれに起因か
- ・[自然/芸術][公/私][男/女]などの対立概念、明治初期の動向に共通→書簡のもつ普遍性か
- ・虚偽への批判→時代的に新しい、もしくはドイツ的なものなのか
- ・啓蒙主義と学校教育の関係
- ・“感傷”ということばの持つネガティブなイメージは何か
- ・女性と文学活動

(文責・荒井)

#### [配布資料] ドイツにおける「書簡文化」(Briefkultur)と女性の書簡

##### A 自己表現の発展としての書簡

「書簡文化」ドイツでは18-19世紀半ば(英仏では17世紀)

- 1 啓蒙主義(神、身分、無知からの個の解放=理性重視 教育の普及 識字率)
- 2 感傷主義(感情重視=繊細な心 魂の交流 暖かさ 友情→女性的なものの評価)

教養市民階級・親密圏(家庭)の成立。「公共性の構造転換」市民→公論 [公・私]

親密圏を統べる女性の教育、たしなみとしての読み書き→読書熱、書簡熱。

私的なものの公的価値。文芸サークル「印刷できるほどすばらしい手紙」

女性の手紙の「自然さ」称賛。ドイツ語の手紙(Gellert)道徳週刊誌。

英仏の書簡体小説流行 女主人公の出現

S. Richardson: Pamela (40, Ü. 43), Clarissa (47-8, Ü. 48-51), Grandison (53, Ü. 54-5)

★Sophie von La Roche: 書簡体小説『シュテルンハイム嬢物語一女友達の手によってオリジナルの手紙や信頼のおける文書から採録された一』C. M. Wieland 編 (1771)

「これは本ではなく、魂だ」Goethe (1772) [Kunst/Natur]

★Goethe: 書簡体小説『若きヴェルターの悩み』(1774) Maxe 体験

- 3 (古典主義)Goethe:手紙のかわりに小説を。教養家庭の筆まめを風刺「何かをするよりそれについての手紙を書く時間の方が長い」(M. W. 1828) [Kunst/Leben]
- 4 ロマン主義(Kunst=Leben, Offenheit, ジャンルの枠を越えたエッセイズム)手紙の文学的価値 F. Schlegel:手紙はもっともロマン的、いや小説(ロマン)そのものが一種の手紙なのだ。批評としての手紙。文学サロン [親密・公開]女のたしなみを越えた個性的な手紙。Caroline Schlegel, Sophie Mereau, Rahel Varnhagen:私が書けるのは手紙だけ。自己省察、瞬間性・断片性。ふたたび女性の手紙を称賛。Grimm:女の書くものは、手紙とみなすのがよい。
- 5 青年ドイツ派(芸術時代から政治・リアリズムの時代へ)書簡の出版(生のあかしとして) [親密・公開]、政治的書簡(目的性)G. Keller:『悪用された恋文』(1885)手紙を書く女(感傷主義)への風刺。  
★Bettina von Arnim:書簡体作品(Briefwerk)『ゲーテとある子供の往復書簡』1835、『ギュンデローデ』40『プレントナーの春の花冠』44 [Fiktion/Dokument] [真・偽]  
※新しいジャンルとしての完成なのか、書簡形式の限界なのか。  
※手紙は「女にふさわしいジャンル」?→女の「自伝・手記」好み。

## B 自己を閉じ込めるものとしての書簡(感傷主義と書簡)

Epistolographie(手紙の書き方)=Briefsteller(書簡文範・手紙を書く人)

17世紀 Kanzleistil 官房書簡文範と galante Briefe 宮廷・懇懇・社交

18世紀=「書簡の世紀」

1709 Neukirch: Anweisung zu teutschen Briefen 自然に理性的に話すように。書簡文範の出版、書簡改革。(書簡の理論、指導→文範)

★1751 Gellert『書簡、書簡における良き趣味についての実践論をそえて』

詩学倫理学教授で大衆作家(詩、寓話、喜劇、感傷主義小説『スエーデンのG伯爵夫人の生涯』1748)人気作家の編集による(実は自作の)書簡の面白さで人気。

「手紙はよき会話の自由な模倣であれ」規則どおりでなく自然に [Kunst/Natur]。宮廷風 galant ではなく Schicklichkeit=市民的美徳を。[Unnatur/Natur]

「自然への教育」という矛盾=女は自然によい手紙を書ける。そういう女を育てよ。

## ★1775 J. G. Jacobi 「手紙について」(In: Iris)

感傷主義詩人、哲学者、小説『ヴォルデマル』77、啓蒙主義の内面化、感情の啓蒙。

自然な手紙＝自然な書き方(表現)→本当の純粋な感情表現(内容)。

「もっともよい手紙は、もっとも美しい魂によって書かれる」

みせかけ、きどり、虚偽の否定。手紙によって「真の自己」へ。[真・偽]

## ★1783 K. P. Moritz 『手紙への手引き』

言語理論、深層心理、哲学。自伝小説『アントン・ライザー』(85-90)

もっとも内奥の、独自(individuell)の考えを表現すべき。書簡文範を全否定。

ただし奇をてらう表現でなく本物のオリジナリティーを→文章論。[真・偽]

19世紀 書簡文範の通俗化・大衆化。市民家庭の必需品・良風美俗＝センチメンタル

※ドイツ書簡文化を育んだ「感傷主義」が最盛期を迎えるのは、英仏より100年遅れ、フランス革命以後の近代市民社会確立期である。心情を重んずる感傷主義はすぐに社会の発展にそぐわないものとなり、風刺の対象となる→「真の感傷主義と悪しき感傷主義」(Empfindsamkeit/Empfinderei)の区別が初めから付随した(Campe: 1776)。

[Natur/Kunst]に代表される近代的対概念に[男・女]が加わり、感傷性は「女心のもっとも気高い特質」(Damen Conversations Lexikon 1834)、書簡は「女にふさわしい分野」ということになった。